

戦後間もない1947年、福岡市で男性2人が射殺された福岡事件で、冤罪が指摘されながら強盗殺人の罪で死刑が執行された元死刑囚の再審を求めるシンポジウム(今村法律研究室・矢澤昇治室長(主催)が神田キャンパスで2回、支援者ら80人が参加して開催された。

# 死刑執行の「福岡事件」 支援者が再審訴える

## 神田キャンパスでシンポ

福岡事件は、軍服の闇取引に由来した中国人と日本人2人が射殺され、西武雄・元死刑囚ら7人が逮捕された。西・元死刑囚は主犯格とされ、56年、共犯の石井健治郎さんと共に死刑が確定。西・元死刑囚は刑が執行され、石井さんは恩赦で減刑されたあと釈放された。



▲会場からの発言も活発だった



6月20日のシンポは、75年6月17日に死刑になった西さんの法要と横笛曲が演奏された。そのあと狭山事件再審請求人の石川一雄さん、作家の鎌田慧さん、福岡事件の再審への支援を行っている生命山シユバイツァー寺(熊本県玉名市)住職の古川龍樹さん、関東学院大学の宮本弘典教授(会場から同大・宮本ゼミ生らが参加し、冤罪の構造について語り合った。

63年に女子高生が殺害された狭山事件で、石川さんは別件逮捕後、代用監獄(警察署内の代用刑事施設)に入れられ、過

「地球は青かった」(ガリソン1961年)。みなさんが生まれるより、さういふ出会った意識と宇宙では人類初の有人飛行、地上では技術革新・高度成長の幕開け、私の高校時代(1962-65年)は、世をあげての理系ブームだった。そのころ私は、数学や物理もそれなりに得意だったので、当然、理系に進むものと周囲も教師も思っていたらしい。

「味」の出る本 『読書のスルメ』 図書発行の『読書のスルメ』は、教員が、学生時代の読書体験を思い出しながら、「今の学生が読んでほしい」というお薦め本を紹介した「肩のこらない読書案内」だ。どの学部で何を学ぶにしても必要な「本を読む」というスリリングかつ能動的な体験を重ねてほしいという思いが込められている。

「地下室の手記」 大庭 健 (図書館長) 『地下室の手記』 渡辺清著 朝日新聞社(朝日選書) 1982

「地下室の手記」 大庭 健 (図書館長) 『地下室の手記』 渡辺清著 朝日新聞社(朝日選書) 1982

「マイ・ドリーム」 バラク・オバマ自伝 『リビング・ヒストリー』 ヒラリー・ロダム・クリントン自伝

『海』 渡辺清著 朝日新聞社(朝日選書) 1982

「成果に見合った給料をもらうべきだ」。この至極当たり前の考えに、著者は経営学の諸理論を用いながら異を唱える。真の国際化とは、他国の文化や風習を理解することで、実は

「虚妄の成果主義」 高橋伸夫著 日経BP社 2004

「独創は闘いにあり」 西澤潤一著 プレジデント社 1986

「日本と中国—相互理解の構造」 王 敏著 中央公論新社(中公新書) 2008

「読めば読むほど味の出る本」といって、この本が浮かんで来た。1986年の発行だが、今読んでみても発光ダイオードなど数えのの本の筆者の感慨、思いが伝わってくる。私自身、研

2点だ。すなわち、大概の仕事は独りで成し遂げることなどできないし、仮に独りで達成できたとしてもそれは大した仕事ではない。一見するとともともらしたがるが、仕事の成果に対する報酬を個人に還元することは大きな間違いである。理論が散りばめられていて、初学者にも平易な文章で書かれている本が、そうした眼力を体得するきっかけになればと思う。

